

兵庫まちづくりプラットフォーム設立準備会

大屋町(但馬地区)

ワークショップ記録



日 時：2003年3月9日(日)

会 場：大屋養蚕農家「いろり」

兵庫まちづくりプラットフォーム設立準備会大屋町(但馬地区)ワークショップ記録

日時：2003年3月9日(日) 13:33～17:43

会場：大屋養蚕農家「いろり」

参加者：有村、上山、大津、金谷、河辺、川村、木村、小林、小森、中尾、野崎(隆)、野崎(瑠)、日吉、藤原、牧野、松原、村上、森栗、八木、吉田

(1) 今回のワークショップの位置づけ

今回提案した兵庫まちづくりプラットフォーム設立事業の構想は、今年度、兵庫県で行った住まい・まちづくりフォーラムの中での「NPO との協働によるまちづくり」の提案を受けてのものです。兵庫県は日本の縮図と言われ、過密から過疎までいろいろな地域を抱えており、このフォーラムは県内6ヶ所で開催されました。住宅審議会でも地域別の地域課題について真正面から取り上げたのは初めてです。その中で特に、様々な問題を解決していく上で、行政だけでは不十分であり、また、民間のパワーの及ばないところもあり、そこを地縁的な団体あるいはNPOを含めたまちづくりの運動と一緒にやれないかということで、各地でNPOの方を招いて議論されました。実は各地で開かれたメンバーを見ると、実は今日ご出席の皆さんが随分含まれています。ここまで賛成したのですから、次のこの計画にもご協力をお願いしたいということで呼びかけさせていただきました。

具体的にどう進めるかということで、兵庫県で設立しましたひょうごボランティアプラザの「行政とNPOの協働事業」の公募へ、神戸まちづくり研究所として「兵庫まちづくりプラットフォーム設立」を提案して採択されました。兵庫県には300余りのNPO法人があり、その内4割強はまちづくりを事業分野に挙げていますが、まち興しとかITとかいろいろなものが入っており、純然たるまちづくり系は、実は神戸まちづくり研究所だけということがあります。相手先としては、兵庫県県土整備部まちづくり局住宅地課を挙げさせていただき、今日は県からも来ていただいています。

プラットフォームで何をやるかとしているのかについては、フォーラムというと1回限りという印象があり、ネットワークというと継続的な組織と取られます。電車のプラットフォームと同じで、目的を同じにする者が必要に応じてそこに集まって議論するということがプラットフォームという呼び方を採用しました。本来は各地にNPOなり市民的な組織が盛り上がるべきなのですが、残念ながら兵庫県の場合は神戸・阪神間以外ではまだそこまでいっていません。行政と一緒に協働でやっていく時に、行政としては継続的なしっかりとした説明責任が取れる団体がほしいということもあり、とりあえず神戸まちづくり研究所がプラットフォームのお世話をします。しかしいつまでもということではなく事業のめどが立った段階で、片方ではそれを担当するそれぞれの地区の組織を立ち上げていただき、それのお手伝いもさせていただくつもりで始めました。

今回はいろいろテーマがある中で、但馬フォーラムでも取り上げられた人口の定着を図る必要性、空き家の活用を始まりとしてUJIターンの人々をどうやって定着させていったらいいかということが大きな議題となります。フォーラムでも、温泉町長あるいは地元の但東町へ移り住んだ方に来ていただいています。そういう古民家など、地域の資源を活用して何とか定住する人を増やすために何ができるかということです。播磨では、地域の伝統的資源、特に景観的資源あるいは建築的資源を生かしていく方法はないかということで、来週は加西で、古民家再生あるいは町並み再生・保全をテーマに何ができるかを検討していただくという、この2つのワークショップを企画しています。

それ以外にも、たとえばオールドニュータウンの再生の問題があり、現在明舞団地で学習しているところですが、こういったものも来年度はプラットフォームとして、ぜひ取り上げる必要があるのではないかと考えています。各地に問題があり、行政にも企業にもできない課題を、どのようにして地元あるいは専門家の方々に取り組んでいただくか。資金面では行政あるいはひょうごボランティアプラザで何とかカバーしていただき、今回についても3月末で一通りこういうことができるということを提案して、正式に4月か5月にこうしたものをやるかという申し込みをするという手順になっています。来年度のプラザの助成額は最大で60万円ですが、事業の見込みが立てば前倒しでやってもいいという知事の言葉もいただいていますのでぜひとも進めたいと思っています。

中尾康彦氏より会場の説明

この大杉の会場を選んだ理由は、一つはこの大屋町はIターンの方が非常に多く住んでおられ、その方にぜひ話をしていただきたいことがあります。それとこの一帯は養蚕農家の3階建てが非常に多く景観形成地区に指定されており、この村もぜひ皆さんに見ていただきたいということで選びました。

藤原次郎氏作の映像による但馬地域の紹介

一昨年の国際映像コンテストで金賞に選ばれた方で、アジア地区のアドバイザーをされています。日常の風景を撮影されたものですが、紙面では省略させていただきます。

(2) ワークショップ(第一部：報告編)

「地域元気づくり協会の構想について」：牧野秀之進氏

従来言われていた但馬の基幹産業は、但馬全域を覆うぐらいの鞆産業と農業でしたが、現在は鞆が思うように動いていません。そういう中で、明生さんが倒産した後のデータを調べると、各市町村で事業所の13~15%が建設業関係で非常に高い比率を占めています。ですから但馬で建設業が引っくり返れば、但馬の産業は成り立たなくなるだろうということまで来ています。公共投資が無い中で、何を資本にして地域興しや地域の産業をつくっていかねばいけませんか。そういう時に、どんな資本があるのかということで、空き家というものに注目したわけです。

現在各市町村で大体130~150戸の空き家があります。今、県民局がやっている但馬田舎暮らしスマイルネットという事業に協力させていただいているのですが、その空き家の中でネットに上がってきて使えるもの、小修理で使えるものが約三分の一です。スマイルネットを見れば分かるのですが、各市町村で10件ぐらいしか上げておらず、1割弱です。なぜそういう状況なのかというと、いろいろな背景があります。現在我々が検討しているのは、純然たる空き家というよりは二次的な空き家(正月や盆に帰ってくるもの、当面の間は使っていないもの)と、小修理さえすればいいというものですが、そういうものの所有者に聞きますと、空き家を手放す、それよりも空き家の情報を流すということに対してすごく消極的です。なぜかと言いますと、どんな人に借りられるか分からない、借りられた後どんな問題が起こってくるのか分からないということがあります。都市では先住権みたいな調子で、なかなか自分に返してもらえず、返してもらうために多額の補償料を払わなければいけなくなることがある。もし相手の分からないところに出せば、そういう問題が非常に起こりますので、スマイルネットのように公開されたものよりは自分たちの持っているネットワーク、いわゆる知り合いを通じて探していくというやり方の方がはるかに安全だと思っています。スマイルネットに対しての問題が、所有者の方としては非常にあるわけです。信用度の高い機関をつくれれば、そこへ出してもらえるかということについては現在調査中です。

先ほどの映像の中でも棚田がありましたが、但馬でも都市から来て棚田を勉強したいという人たちの集まりとか、いろいろな事業があります。そういう事業と絡めながら、まず但馬を知ってもらう中で、この機関は信用できるよということを所有者に認識してもらえようシステムをどうつくっていくかということを県民局と一緒に検討しています。県民局の方では将来はそれを、但馬でいろいろ活動している人たちと都市から来ている人たちで組織化して、独立させようとしています。今まで但馬では、実は私も知らなかったのですが、全てのシステムづくりは行政を中心にしてなされてきました。今回始めて行政が手を離すことを前提にして組織づくりをやっていこうとしています。それがこの「地域元気づくり協会」の構想につながってきたのです。

一方利用者の方は、昨今のブームのような形で多自然居住をしたいという人からの問い合わせが各町へ相当あるそうです。その時のイメージは、田舎暮らしのイメージということで、菜園がついていたり近くに田んぼがあったりというような雰囲気なのです。しかし実際は但馬の方でも空き家は様々な状態で、たとえば生野町ですと町の真ん中に空き家があるという状態です。これは豊岡市でも同じことが言えます。菜園があってというのは、実は相当な覚悟をして来ていただかないといけないような地域になってしまいます。確かに菜園がある空き家はあるのですが、その人が本当にそれを見た時に、よく利用するかというくらいには実は荒れています。

それから今までのデータから言いますと、都市型居住者の人が但馬に来た時に、どれぐらいの値段で

空き家を購入したいかという、土地付きで 500 万円が限度です。修理についても同じように 500 万円が一つの限度になっているなど話しています。500 万円以内でそういうことができるかということになると、非常に難しい部分もあります。

そうすると、買うことよりも但馬を知ってもらおうということで短期利用を考え、その上で IJ ターンをはかっていこうという作戦を今練っています。短期利用というのは具体的には、一つはリゾート時の宿舎地として提供する。もう一つは、これは棚田の人たちなのですが、泊まる場所としてやっていく。後一つは企業の保養所、中小企業の保養所のような形での対応ができないだろうかというような考え方で、それを一括して情報を提供し確保していこうと考えています。利用者からは、それを利用するお金を貰っておいて、そのお金で維持管理をはかり、地域に建設業の人がまわるようにならないだろうかというのがこの構想なのです。

この構想がまだ日の目を見ないというか、実際に難しいと思っているのは、一つは今まで自分たちの地域に対して自らの行動で組織づくりをやったことがないということが一点あります。こういうことをやるのは行政の問題だという認識が非常に高いのです。もう一点は、実際に但馬でも大工さん、左官屋さんをはじめ優秀な技能職の方が非常に少なくなっているのと、高齢化していることの二つの条件があります。

実際に家の管理などをやってもらえる人が、どこにどれだけおられるかということが分かるような技術者マップをつくらなければいけない。そういうことで別組織ですが、私どものところで但馬住まいづくり勉強会というのを開いており、そこでそういう技術者マップをとりあえず作り、信用のおける技術者のリストアップをはかっていかなければと、今、情報集めをしている状態です。それができましたら、地区建設協同組合みたいなものをつくって対応できるだろうと思っています。特に但馬の場合には左官屋さんが非常に少なくなっています。皆さんもよくご存知だと思いますが、実際に使える土をつくるのに 3 年ぐらいかかりますし、その場所を確保するだけでも大変なのです。その辺で、技術者の養成と技術者マップをつくることに関しては、地区建設協同組合のネックになっている部分があります。

ただその中で、情報収集だけは比較的行政を通じてやりやすい雰囲気が出てきていますので、これからその情報収集を中心にして、その情報を流していきます。先ほども言いましたように基本的なスタンスとしては、まず但馬を知ってもらおうということなので、二次的利用というか短期利用を考えています。ですから、但馬の空き家情報よりは、むしろ但馬でどんなことができるか、どんな魅力があるか、お祭りとかをやっていますということで、他の地域からまず但馬に来てもらう差別化をはかろうと思っています。その情報に付随させた形で、泊まる場合は空き家を紹介しますという形で空き家も出しておいて、何年か通ってもらおう中で但馬に移住したいというような方が出てくれば幸いです。出てこなければそのまま短期利用ですっていいではないかという考え方で今動いています。

ですから、元気づくり協会というのは、県の住宅マスタープランの中に地域元気づくりという言葉があったのでたまたま使っただけで、元気づくり協会が本当にできるのかどうかは夢のまた夢というような状況です。ご質問があれば皆さんと一緒に知恵を借りたいと思います。

「但馬に移り住んで 1(家具づくり)」：上山隆久氏

神戸のアパレルで 16 年間企画の仕事をしていましたが、1992 年の 12 月に突然会社を辞めました。40 になれば自分の好きな人生を送りたいという前からの希望もあり、突然家内に通告しまして翌年の 4 月にこちらへ来ました。前の仕事がサラリーマンで、田舎暮らしに通用するとも、何もそういう要因が無かったので、とにかく田舎に来てやろうということだけを考えて行動したのです。どうして食べていくか家内とも相談したのですが、民宿でもしようという予定でこちらへ来ました。当てがなかったのですが一人だけ知り合いがいて、その人から情報を多少なりとも聞きして、僅かながら知識はあったのです。

なぜ大屋に来たかというのは、魚釣りが好きで谷歩きをずっとしてしまっていたので、こちらに来る 20 年ほど前から、古き良き時代から大屋には足を運んでいました。どうせ引っ越すのなら川の水がきれいなところへ行ってみようと思い、それがたまたま大屋だったので。

後のことは何も考えずに役場に飛び込みますと、「お前は誰だ」と言われて、「こちらへ来たいのだ」と言うと、最初は全然本気にしてくれませんでした。3 回くらい足を運んでから「やっと本気なのか」と言われて、空き家探しが始まりました。しかし、なかなか進展しなくて、これでしたらいっそのこと

逃げ道が無いように家を売ってやれと思い、向こうの家を売ってしまったのです。それで「家を売ってきました」と大屋に来たら、「ほんまか、そうしたら探そうか」とあちこちと、役場の方もほぼボランティアと一緒に同行していただきました。休日を利用して日曜日ごとに僕が毎週こちらへ来て、いろいろ家をあたったのですが、どこも仏壇があるとかお墓があるとか言って、空き家があっても貸してくれなかったのです。こういう風体ですので爆弾をつくるのではないかと、怖さもあるだろうし、まずは面接で断られたケースも結構ありました。それで最後に1軒だけ、「ここしか無いがどうする」と言われて、見もせず決めました。前に3人ぐらい見に来て、皆断ったけれどもそこでいいかと言われましたが、物件を見ずに一応了解しました。

いよいよ借りるということになり、家を少し直さなければいけないということで、家に入ったところ、家が逆への字になっているのです。床はぼろぼろで、床板を全部めくりました。そうすると小黒が、ちょうど家の中心部に大黒と小黒というのがあるのですが、小黒の下が無いのです。それで家の建具が全部ロックされてしまっていて全然動きませんでした。近所の人は白蟻が全部食ったのではないかとあっており、湿気屋敷で床下は全部腐っていました。ここしか無いし、どうしようかと思い、初対面ですが近所の大工さんを訪ねて相談しました。そうしますとジャッキで上げればいいいと言われ、それでジャッキを借りてきて持ち上げて、ちょっと教えてもらいながら三ヶ月ほどかかりましたけれど、基礎をやり直しました。ですから1993年の1月から直しに入り、4月になりやっと引越しができるという状態になったのです。

さっきも言いましたように、何も生活の当てが無かったので、民宿をしようと家内と言っていたのですが、珍しいもので友だちが毎日のように来るのです、食い逃げの客ばかり。一週間ぐらいしたら、向いていないからもう止めようと思いました。それで自分一人のできる仕事をしようということで炭焼きを始めました。それでここから20分ぐらい入った古屋というところに廃村になった集落があるのですが、そこで炭焼きをしている方の仲間に入れてもらって1年半ほど炭焼きをしました。夏は鮎の職漁師、釣竿を持って川に入り釣った鮎を売りに行ったりもしました。それと並行して、今やっている家具づくりを始めていたのですが、とにかくどれをしても最初は食えなくて、正直なところ1年ぐらいでギブアップかなと思っていました。勤めもほとんど口がありませんし、どうしようかと思っている間に、まあまあ家具の方がうまくいきだしまして、かれこれ10年になるのですが、奇跡的に今までこの田舎で暮らしています。

<どちらから来られましたか？>

私は、生まれは大阪ですが、来たのは神戸の西神中央からです。

<自分で直したということですが、手入れのお金はどれぐらいかかりましたか？>

最初に役場からIターンで30万円くれたのです。そのころはIターンという言葉は無かったのですが、外部から家族単位で来たら奨励金が出ました。この30万円で1回目は大体足りました。去年、半年がかりで第三期工事をしまして、それを全部合わせるとすごいお金がかかっています。大工さんに頼むお金が無いので全て自分でしました。木工が仕事になりましたので、仕事場も建てました。木工を最初は全然するつもりが無かったのですが、やっている内に結構おもしろくなりました。古家を直すのに昔の部材とかをばらしますと結構すごい仕事、今見たらもっと思うのですが、その頃は分からないなりにもすごいなと思いながら、ばらしたり直したりしていたのです。家を直すとするのが無くなり、炭焼きをしながら家の棚をつくったり家具をつくったりしていました。すると知り合いが自分の家のものも安くつくってくれと言われて、そんな感じで自然発生的に今の仕事になってしまいました。

<ご家族の評価は？>

最初の2年ぐらいは犯罪者でしたね、何かあったらあんたのせいやと。

<ご家族は何人ですか？>

4人です。長女が今高校2年生で、こちらへ来て1人できましたので、娘2人と4人家族です。子どもが小学校2年生の時に連れてきました。西神は便利なところで、マンションの前が小学校だったので徒歩2分でしたが、こちらへ来ていきなり40分になりました。

「但馬に移り住んで2(農業)」: 金谷昌高氏

私は兵庫県の平成5年度新規就農者支援事業の1期生です。最初の年に応募して、うまく当たりくじを引いたのかわかりませんが、この村に農業をやりに来たのです。

実は私は元町で生まれて魚崎で育ち、大学と最初に就職したところが東京なのですが、その後こちらへ戻ってからは鈴蘭台に住んでいました。エンジニアということで、工場勤めがほとんどで事務はあまりやったことが無く、ものづくりを一生懸命やっていたのです。今から思えば、あれがストレスだったと思うのですが、その頃は団塊の世代の過当競争の中で本当に目一杯馬力あげて生きていました。自分では何でそうなるかは分からなかったのですが、ストレスで不眠症になり、ナイトキャップがいつの間にかアル中ようになってしまっていました。酒が無いと寝られなくなり、朝になってもまだアルコールが抜けなくて、今の道交法でしたらアウトですね。そういう生活で、上司から「おまえ、ちょっとおかしいぞ」と言われ、アルコール気を抜こうと思い淡路島の断食道場へ行きました。その頃から、田舎というものが見えてきました。都会だけで住んでいたのですが、価値観の違う世界がすぐ脇にあるのだということに気がつき、それから音をたてるように価値観が変わっていきました。

最初は家庭菜園をしていたのですが、どうかなと思って軽い気持ちで申し込んでみたら通ってしまったので、周りを説得するにはいい口実ができたかなと私は思いましたが、周りは説得されなくなりました。最初、農地とか農業に関して話はどんどん進むのですが、大屋町でどこに住むのかということとはぎりぎりまでわかりませんでした。町の方が車に乗せて走ってくださるのですが、「今通過したところのあの家」と言われるのです。要するに、そこで停まってあそこ指をさしたら騒いでしまってもう駄目なのです。家探しはそういうようなことで、町の車に乗っていて行き過ぎてから、もう一度引き返しますからよく見てくださいという感じで探しました。私の場合まだ借家なのですが、ここも上にはまだ持ち主の方の私物があると思うのですが、そういうふうなところで、家主さんとは全然会ったことはありません。帰ってくるかもしれないということでしたが、10年近くになりますはまだ帰ってこれてなく知りません。家主さんがどういう方かは集落の方はもちろんよくご存知なのですが、詳しくは話してくださらず、こちらも根掘り葉掘り聞く必要も無いので聞いていません。

上山さんはご自分のことであまり言われていませんが、第3期工事をされて、本当にこういうことができるのであれば、どんな家でも良くなってしまいます。家具づくりをされているのですが、玄関から中へ入ると、私から見たら建具というか全部家具です。微にいり細にいり手が入っていてすごいのです。柱も四角く製材したものでなくて、これはどうして合わすのだろうかというふうなものを平気でされています。あんなことができるのであれば言うことはないと思います。話の中で500万円が限度という話がありましたが、そうではなくてもっと価値のあるもの、NHKのドラマではないですが「ほんまもん」というものを一度味わえば、それに対する執着というのが生まれてきます。500万円とかそういうことではなくて、ものというのが生きてくるのではないかと考えています。

自分もそうなのですが、サラリーマンをやっている時は、食べるものについては、フランス料理のフルコースで2万円かかったのだから満足するのだという食べ方はしたことがあるのですが、カロリーとか値段とかで決定して、食材がどうのこうのということは考えたことが無かったです。けれども、自分が有機農業をやってみて、野菜が本来持っている味というのが段々分かってくると、安ければいいだろうという売り方をされているところの食材は、できれば食べたくないというふうに思います。自分が住む場所ということになってきますと、障子をぱっと開けた時の雰囲気とか、夜になり水の音が聞こえてくるとかということがもし体験できれば、できればそういうところに住みたいと思われる方は多いのではないかなと思っています。それは多分500万円という話ではないと思います。今、ほんまもんが売れているのです。大屋町は天滝という観光施設はあるのですが、私もみたいです。都会から移り住んでくる方が多いというのは、住んでみるとものすごい温かさとか、変化に富んだとか、都会では味わえないものが本当にたくさんあるのです。

最初にUJIターンとかおっしゃったのですが、実は私は今、ダブル生活をしていると思っています。と言うのは、鈴蘭台の家をまだおいてあるのです。もちろん冬場は農業ができませんので、今も神戸からこちらへ帰ってきたのですが、実に贅沢な生活をさせてもらっています。金額ではありません。日常出て行く金銭的なものは、自分で食べ物をつくっているということがあるのですが、おそらく都会で生活していたよりもこちらの方が安上がりでできると思うのです。それで、一見別荘を持っているかのような生活を今味わっています。家内は向こうの鈴蘭台で教室を持っています、1週間向こうで教室を

やり、こちらで1週間生活し、また1週間向こうで生活するという、本当にダブル生活、二重生活をしているのです。すごく忙しい生活なのですが、変化に富んだ充実した生活をしてきているのではないかなと思っています。私も冬になると都会をしに行けるのです。都会をするとまたこちらの良さがもっと分かってきます。こちらに埋もれてそれが日常になってしまうと、新鮮な気持ちで自然と接することができないのではないかなと思っています。

<お子さんもダブルで？>

一番上の子どもが大学受験の時期に、お父さんが立ち上がるまでの間手伝うとこちらへ来たのですが、農業をやっているうちに戻るのが阿保らしいという感じになりまして、今私のパートナーとして農業と一緒にやってくれています。もう引っ張りだこで、あちこちの講演会に講師として行っています。一番下の子どもが小学校5年生の時にこちらに来たのですが、やはり5キロから6キロくらい毎日歩いて通学して、今は神戸の芸工大の建築に行っていますが、多分今日の話は彼の方が、興味があるのだろうなという気がしています。

<仲間は他にも何人かおられるのですか？>

(上山) 自分の場合はこういう手仕事の仕事をしていますので、焼き物や彫刻や絵描きさんやら結構町内にいるのです。そういう仲間とここで展示会をしたりしています。大体酒飲み中心ですね。それと金谷さんや、養鶏されている人や有機農業をされている人とのジョイント、今皆一緒に仲がよいのです。(金谷) 農業をやっているところも、この平地でやっているのではなくて大屋高原という山の上でやっています。有機農業をやっているのですが、大屋高原で園農をやっている人が9件くらいあるのですが、地の方は3件です。ですからその他の方はどこから来た方ということです。

<但馬地区ではこの大屋町が特徴的なのですか？>

(中尾) 都会からはなぜか多いです。やはり前の役場の方が熱心だったというのがあります。20世帯ぐらいはあると思います。もちろんこちらに1回住んで、すぐ帰られた方もあります。結構芸術をやっておられる方が多いですね。

「但馬長寿の郷の交流支援事業」：日吉和久氏

長寿の郷は県立の施設で、かなり広いスペースでいろいろなことをやっています。平成10年に二つの目的を持ってオープンしました。一つは、但馬の保健医療・福祉の総合的な推進を行政としてやるということ。もう一つの大きな柱として、地域間交流あるいは世代間交流の施設としての位置づけがあります。その中の大きな事業として、今日のテーマとも絡んでいますが、都市と農山村との交流を支援していくような事業をいくつかやらせていただいています。今日はその紹介と、その事業を通じて今日のテーマの空き家を見つけて住んでおられる方がおられますので、その紹介をさせていただこうと思います。

今日のテーマに真正面なのは田舎暮らしセミナーになるのかと思います。県庁で記者発表して都市部の方々を募集して、1泊2日で長寿の郷の中や周辺の集落あるいは但馬全域で、農業体験や生活体験あるいは町を見るということもやっています。それで私どもの職員だけではとてもやっていけませんので、いろいろな地域の方に手伝いに来ていただいています。そういう手伝いに来ている地域の方々と、お客さんである田舎暮らしセミナーの参加者で囲炉裏を囲んでわいわいやっていただき知り合いになってもらおうというねらいもあります。それは年3回ぐらいで1回が20人程度なので、そんなにたくさんの人数ができるのではないのですが、その中で更にリピーターと言うか、良かったなという人を対象にしてOB会というのをつくっていただいています。その方々に声をかけ、OBセミナーというものを更に年1~2回やっています。長寿の郷に来られるのは田舎に住んでみたいという方はかなりまれで、とりあえず観光でとか、ちょっと田舎暮らしはどうなのかと軽く浅い体験を望んで来られるわけです。そういう中で、たまに但馬に暮らして但馬に関わりたいという方もありまして、そういう人をOB会でもうちょっとディープな企画なり自分たちでの企画、どこどこを見に行こうとか炭焼きとかをやってもらっています。そういう仕掛けをしています。ちょっとだけ体験のメニューは、稲刈りや田舎料理づくり、草木染め、蕎麦の収穫、燻製づくりなど、どこでもやっていると言えばやっているのですが、そう

したことを楽しんでいただいています。

こういう中で、OB セミナーの中で今分かっているのは一人だけですが、去年から大屋町に住んでおられます。今年のメニューには無いのですが、13年度に空き家見学を、多分ここも見せていただいていると思うのですが、いろいろなところを見せていただくツアーを田舎暮らしセミナーの中でやりました。12年度の田舎暮らしセミナーに初めて参加され、13年度も来られて空き家見学で大屋町も含めているところを見られました。別に我々が斡旋したということではなくて、独自に岡山の方へも行かれたらしいのですが、阪神間におられた方が去年から大屋町に住んでおられます。お聞きしますと、先ほどの方と同じで、家は2軒持っておられ1週間ずつ来られているみたいです。その家もやはりかなり修繕が必要な家だったようで未だに修繕をされています。そういう意味で長寿の郷の事業・施策というのは、空き家やまちづくりには直接関係は無いのですが、そういう広く浅い受け皿、とりあえずの窓口にはなるのではないかと考えています。その中でもう少し但馬に定住なり半定住されたい方を、まちづくりや農業、あるいは各町にどのようにしてつないでいくかということが課題で、もちろんスマイルネットのことも紹介はしているのですが、そういう例がOB会のようなところでは何人が、潜在的な人がおられるのではないかなという気がしています。

他に同じような事業で、農業体験教室・森林体験教室、ひょうごユースセミナー、カブトムシ探検隊、野外アート展とワークショップ、ふるさと庵四季行事をやっています。カブトムシ探検隊は、まちの子どもにカブトムシの幼虫を取りに来てもらおうという結構大きなイベントで、去年は子どもが500人、親御さんと合わせたら1200人が集まり、ちょっとしたイベントになっています。地元で熱心な町興しグループがあり、その方々にはものすごく手間をかけていただいています。1200人集まるというコストパフォーマンスの非常にいい大イベントです。野外アート展とワークショップも、先ほど木彫のお話がありましたが、これも地元やいろいろな造形芸術家の方々のご協力で、私どもの売りであります萱萱きのふるさと庵という施設を中心として、野外展を毎年秋にやっています。芸術家の方だけの交流ではなく、一般の県民の方が来て参加できるようなイベントをいろいろやっています。

PRばかりですがもう一つだけご紹介します。但馬で地域医療をやってみませんかということで、私どものセクションではないのですが、僻地医療という言葉をご存知かどうか分かりませんが、医療過疎地域へお医者さんに来ていただくような仕事も長寿の郷でやっています。このサイトを立ち上げましたら結構反応があるようで、掲示板のページを見ると結構遠いところの人がアクセスしています。そういう意味では、空き家というよりも空き診療所をなくすということにも寄与させていただいているのではないかと思います。とにかく空き家居住のインフラとして非常に重要なことかと思えますので、そういうソフトの資源といったことについても若干のこともやらせていただいているということです。

「イギリスの古民家活用法(セルフケイタリング・ホリディ)」: 小森星児氏

何か職場をつくらなければいけないということで、今まで地場産業の振興やハイテク関連などいろいろなことを過去何十年間かやってきましたが、残念ながらあまりうまくいきません。地域に産業を誘致しようとしても、出て行く方が多すぎていくら誘致しても焼け石に水というところがあります。そこで何か地域の資源を生かせないかと思い出したのが、30年近く前にイギリスに家族と滞在していた頃によく行きました田舎の貸し別荘です。今はどうなっているのだろうかと思いインターネットで調べたら、結構流行っていることが分かったのです。以前の貸し別荘はあたれば幸いということで行ったのですが、今はネット上でこんなことまで載せているのということもあり、直接お役に立つかどうかは別ですがご紹介します。

配布資料のイギリスの地図ですが、左の図は人口密度です。右下の大きな黒い塊がロンドンで、左上がリバプール、マンチェスター、シフィールドといった北部の工業都市、そして真ん中がバーミンガムです。このロンドンからマンチェスター・リバプールまでのところがイギリスの中央部、イングランドの人口稠密の都市化された区域です。右の図は人口増加率です。行政区画の小さいところは当然ながら大都市地域で、広いところは農村的な地域です。これを見ると、農村的な地域は人口密度が高いのです。市街化の進んだ地域、つまり行政区画が小さいところほどマイナスです。この現象は1960年から70年ごろに顕著になり、カウンターアーバニゼーションと呼ばれています。大都市化の後に公害化が来て、その後に農村地域の人口増加、つまり過去2世紀の間、人口は大都市に集中してきたわけですが、それ

が完全に逆転したのです。これはイギリスだけではなくヨーロッパでも、そしてアメリカでも見られません。大都市ほど人口が減り、人口が少ない地域や非常に離れた遠い地域の人口が増えてきています。その原因についてはいろいろ説があり何とも今お答えすることができないのですが、一言で言えば都市化の時代は終わったのです。特に所得の高い人、若い人、高い教育を受けた人は農村地域に住みたがりません。精神的な豊かさを求めるということだろうと思うのですが、なぜ日本ではそれがおきないのでしょうか。今まで日本でおきてきた現象というのは、ほとんどヨーロッパ・アメリカの後を追ってきているわけです。この時期になり、実は一方では都心回帰というのが現実におきているわけですが、田園回帰というのは非常に少数なのです。これは日本だけが特殊なコースをたどるのか、それとも本当は田園回帰というのが潜在的にあって一般化するはずなのにそれを妨げる要因があるのかを考えなければなりません。その際に行政の側の対応としても、先ほどお話がありました、必ずしも一般的な田園回帰については歓迎的ではないのです。Uターンのように出て行った人が帰ってくるのは歓迎します。全然縁もゆかりも無い人ではあまり歓迎されません。本当にそれでいいのかどうか。逆に言うと、今までの人口呼び戻し作戦だけでは不十分で、そういうことを検討していく必要があるのではないのでしょうか。そういうことで、具体的にどういうことをやっているのかということをご紹介します。

貸し別荘制度がどういうふうに運用されているのでしょうか。初めの資料はセルフケイタリング・ダイレクトリーです。その会社のホームページを見ると、まず地域をどこか指定するのですが、たとえばレイクディストリクト、いわゆる湖水地方という大変有名な観光地を指定すると、写真を見出しにつけているところとそうでないところがあるのですが、まずどういうところがあってアドレスはどこだということが分かります。一番下のボタンを押すと次のページに移り、大写しの写真が出てきて所在地や設備が分かります。これだと寝室が4、風呂が3、居間が2部屋で、ものすごいですね。料金は180ポンドから400ポンドで、これはシーズンによって、ローシーズン、ショルダーの時、そしてピークの時と違うのですが、平均的には週に200ポンドくらいですから、大体4万円くらいになります。これはその金額で7~8人が泊まります。とにかく1日1万円で行けるのです。そこへどうやって行くかとは、次にディスプレイマップがあります。スケールがありまして、右の方へクリックしていくと拡大図で道路のどこにあるかまで分かります。左の方へ行くと、全国のどこにあたるかが分かるという仕組みで、この図は多分2万5千分の一くらいの地図です。これで迷子にならずに交通が、列車やタクシーで行くとうなるかということが分かり、位置が分かるわけです。次のページには、実際にどんな様子だということが写真で示されていて、これなら行ってみようかなという気になります。これはメドウバンクで、こんなに大きなものは珍しいのですが、8人から10人という非常に大きなグループを収容できます。次のページは別の会社です。イングランド、スコットランド、ウェールズ、アイルランド、フランスの旗があり、そこの中からまず希望の地域を選ぶわけです。たとえばイングランドを押すと、次のページでイングランドのどこか、人数、時期や期間、そしてイギリスらしくペットの有無を選ぶと、先ほどのものより情報が徹底しており、それに当てはまる場所が全部写真付で出てきます。Cotswolds and Heart of England、シェイクスピアカントリーを4人で行くとして選んでみました。料金も指定した期間の料金で、大体50ポンドですから中間的な料金です。4人が泊まれるだけの部屋があり、ベッドのリネンまでは付いています。調理の道具も全部揃っていますので、持って行くのは消耗品くらいです。次のページでは、内部のインテリアも写真で見ることができます。別のページでは、料金が週別に、期間によってどれだけ違うかが一覧になっています。ご覧いただくと分かりますように、7月から8月にかけての時期が一番高くて400ポンドです。一番安いのが、100ポンド少しくらいですから、ハイシーズンとローシーズンで大体4倍くらい違います。もうすでに予約済みのところもあります。こういうところは割りとりピーターが多く既に予約しているか、オーナーがこの期間に行くというのと二種類あると思います。

まとめますと、まず全体として農村地域の人口がどんどん増えてきています。第二に、その一つとして、良く知っている地域に行っている内に段々なじみが出てきてそこへ定着したいという人が出てくるわけです。しかしそこへ家を買っても引退するまでは住みません。それでは遊ばせておくかということそうではなくて、年の内3週間か4週間は自分用に取っておき、それ以外はこういう業者に貸すのです。これは地中海沿岸で発達したやり方なのですが、航空会社とタイアップして週1回飛行機を飛ばせてお客を運ぶというやり方でやっています。もちろんそれだけではなしに、元々のオーナーなり地元の人が副業として自分の住宅を改修する、あるいは他の人が持ち家を買ってレンタルするというやり方もある

と思います。この場合には掃除とか洗濯とかが、安定した収入として入ってくるわけです。私も地中海沿岸の方も行ったことがあります。1日1時間だけメイドを使えるという切符があり、掃除でも洗濯でも何に使ってもいいのです。ポルトガルやスペインの方で英語が通じませんので難しいことは頼めませんが、1日1時間だけ来てくれます。それで、奥様方には大変喜ばれています。さすがにイギリスでもセルフケイタリングというのはあまり好まれない。せっかく1週間遊びに行くのに何でご飯をつくらなければいけないのかということがあり奥様には不評なのです。それはともかく、そういう意味では地元で雇用を生み所得を生むという点が特色です。どれぐらいに収入になるのかは、年間に平均的な住宅で100万から150万程度を会社は保障しています。持ち主は住宅を提供するだけで、管理は一切会社にあるか、あるいは更にサービスを下請けで受けて別に収入としています。最後にこのシステムが成功するには、先ほどもお話がありましたが、やはり信頼性と情報の正確さです。業者の方でもかなり検討していると思いますが、ほぼ知りたいことを全て情報として流しています。きちんとしたサービスレベルが当たり外れ無しに確保できるというのは、ユーザー側から言うと有り難いシステムです。先ほどの話のように、公共がやる場合は持ち主が持ってきた情報以外になかなか書けません。公共が提供できるサービスは限度があり、付加的なサービスや情報はやはり民間にやってもらうより仕方が無いのではないかと思います。そういう意味で、きちんと評価ができ正確な情報が流せる組織というのが無いと、こういうシステムだけでなく空き家システム自体が難しいのではないかと思います。

(3) ワークショップ(第二部：討論編)

テーマ1: 田舎暮らし促進の課題と展望

- ・ 但馬まちづくりフォーラムの基調講演をお願いした馬場温泉町長は、若い人を引き止めるために、空き家を積極的に紹介していき、中層の町営住宅50戸を建てると話された。大阪から但東町に転入されたパネリストの榎原さんは、大阪に住みながら分譲宅地に家を建てる時に、業者の紹介も無かったので、エス・バイ・エルに頼んだという問題を指摘された。奥様が車を運転できないというもう一つの問題も指摘された。定年後を田舎で暮らす計画だが、これは但馬地域ではあまり歓迎されざる存在です。それはどの町も小学校を維持できないというのが大きな問題になっており、子どもを連れて来る40歳までの方へは優遇措置があるが、定年退職者には支援措置は無いのです。地元からのパネリストの西垣さんは、20戸以下の集落のお世話をされており、大阪でサラリーマンをされてから町に就職し最近退職された方です。とんぼ池をつくるということで、ボランティアに泊まりに来てもらい作業を手伝ってもらうという形で交流をしている。泊まるにも都市の方の要求が高すぎることで、村に来たら村のおきてに従って欲しいということがあり困っていると話された。先ほどのお二人の報告を聞くと、村のルールに順応された面もあるだろうし、受け入れる側も自分たちのルールを押し通してはだめだということもあるのではないかなということを感じた。
- ・ 大屋町は急激な過疎に襲われているが、昔は明延の三菱鉱山があり、この近辺では唯一のデパートや映画館があった町で、そういう意味では免疫ができていてまだ入りやすい。
- ・ 生野も同じことが言える。
- ・ 大屋町内でも、集落によって違う。南谷や西谷は割り入りやすく、最初は結構しんどかった。
- ・ 田舎暮らしをしたいが、そのあたりのことがどうも不安と思っている方が多いと思う。
- ・ 裨益を都会的に考えれば半日チャージされるのを、お金での解決や代理人を出すことで肩代わりしてもらえることが考えられる。しかし田舎では働き手がかつかつの状態なので、出て実際に汗を流してやり通さなければいけない。集落の中には農業をしない方もいるが、裨益はかかってくる。
- ・ このあたりではコミュニティのシステムはちゃんと機能しているということなのか。
- ・ お年寄りが元気なのでまだ大丈夫だが、10年後には農業関係の水路などを維持するのが難しくなり、その分をたとえば行政が上下水道と同じようにして守れるのかと心配になる。
- ・ 年齢的に都市の60代はリタイヤ組だが、但馬では60代は現役だから、その人たちの発言力は相当しっかりしたものがあり、70半ばを過ぎてやっと現役引退となる。家の造りとも関係するが、但馬の場合はなぜ縁側があるのか。エス・バイ・エルで建てると縁側が無く、地域の人が自由に入って来れない。縁側は近所づきあいをやるための場所なのです。
- ・ 但東町では月1回の全員集会があり全戸から必ず1人は出なくてはならないということを聞いたが、

このあたりではどうか。

- ・ 全員は年 2 回で、役員は月 1 回。井守(ゆもり)という水路管理の役もあり年 2 回の掃除をする。
- ・ 村有財産や共有財産の件もある。後からの人は関われないが、村有林とかを手入れする必要がある。
- ・ 私の集落では、10 年定住すると共有林の資格が発生する。
- ・ 左官屋が少なくなっているという話があったが、養蚕農家が好きで拝見していると皆さんきれいに手入れされている。左官屋がたくさんいないとできないことで、伝統的な左官の技術がこの地域にはあるのかと安心していただけなのだがどうなのか。
- ・ まず左官をするための土をつくることから始まっていかないといけない。土は 3 年ぐらい寝かす間にすごい臭いがでるので、町中ではつくれない。今つくっている人たちは、わざわざ山へ持って行ってつくっているため非常に長い期間が必要となり、その間は左官業としては湿式工法から乾式工法へ移っている。左官組合の人たちに聞いても、左官で飯を食おうとすると乾式工法でやるしかないので、漆喰を塗ったり壁を塗ったりという技術はどんどん落ちていっていると言われていた。
- ・ きれいに見えるのは都会と同じで、モルタルの上に表面仕上げをただけだと思う。
- ・ 丹波フォーラムでは稲井さんが「ささやま 100 年家」の計画を紹介されて、会場に壁土や漆喰の材料を展示していただいた。積極的に PR すれば伸びる。来週の加西のワークショップには稲井さんも参加されて現場も案内していただけるので、丹波の話はそこで聞けると思う。
- ・ 丹波にはいい左官がいる。但馬より京都に近いので、京都とのつながりでまだまだ仕事がある。
- ・ 職人の階層で言うと下のほうになってしまうので若い人がつかない。
- ・ 丹波のある委員会に出た時、メンバーの中に地元の女性が誰も入っていなかった。女の人の集まりは婦人会くらいしか無く、女の人の発言権はここではどうなのか。
- ・ こちらへ来てそのことに一番驚いた。いまだに男尊女卑みたいなあからさまな習慣がある。初事といつてどこの集落でも正月開けにするが、女の方は全部拒否して全然楽しめない。
- ・ 但馬になぜ女性センターが無いのかとある女性が言っていた。
- ・ 外から来た人の奥さんばかり固まってしまう、プールに行ったり食事しに行ったりしている。同世代の方と話すことがあまり無い。農業をやっているとほとんど年上の方とばかりになる。
- ・ 但馬、丹波では、女性の小さなグループが何とか頑張っているところだろう。
- ・ 来た時よりここ 10 年で大分変わってきている。世代も変わってきているし、ちょっとずつ改善されてきている。
- ・ 財産区というか、村のそういうのは全部男子。一応いろいろな会議をされて民主的ではあるのだけれど、それも形式民主主義。
- ・ 財産区は神戸市内でも同じで男の世界。
- ・ 子育てのグループや人形劇のボランティアをやっているグループは元気な女性がたくさんおられるし、都市から来られた女性は大変元気。長寿の郷で講師をやっていた方に聞くと、どこかから来られて、自分でやり人にも教えるという元気な方が多い。
- ・ 地元の女性でも学生の時に海外留学されていた方は、半分 I ターンだが、元気がいい。
- ・ 地元だから言いにくいと一緒にだと思ふ。都会でも元気な方もいるがそうでない方もいる。絶対数が多いだけの話で、集落単位で考えると 100 軒あるかないかの中で、女性ばかり元気になれと言っても難しい。だから私はそんなに負荷は考えていない。しわ寄せは確かにあると思うが、それが深刻な問題というほどでもないと思っている。
- ・ 少子高齢化の問題で、女性の受け皿をつくらなければ、ますます人口流出になるどころか、支える者がいなくなる。
- ・ 地区によって違うと思う。大屋では今までワークショップなどをやっていなかったが、最近やり始めると意見がちゃんと出てくる。公民館を造るにしても、間取りからそういうことをやっていくという手法がまだ確立していない。
- ・ ワークショップをする場合でも女性グループを意識的につくらなければ発言しにくい。
- ・ 仕事ができると変わる。大屋の天滝の土産物店の経営を女の人たちがやって発言権ができて変わった。地区ごとの雰囲気があって、そういう情報が欲しいし、インターネットで見られればおもしろい。
- ・ 先日、丹波の NPO と神戸の NPO が丹波で合宿して交流をした時に、丹波でバイオマスのことをしているトマさんという人と話をした。彼が田舎暮らしを始めたきっかけは田舎にはコミュニティがあ

るだろうと思い、自分がそこへ入って何かやりたいと来たのだが、丹波の西紀町に入ってみたら高齢者ばかりでコミュニティが倒壊していた。それで自分が一生懸命走り回ってコミュニティづくりから始めたという話をしていた。

- ・ ゆいの会というのをつくっている。白河の合掌村は 5~600 人で共同して屋根を葺き替えるが、それと同じようなシステムを氷上町でつくった。村有林の手入れえをしたり、不法投棄された電気製品を月 1 回片付けたりしている。昔の村の組織を維持するための組織をあえてつくった。
- ・ 彼がそれだけ活発に地域で活動できたのは、そこに自分の役割があったから。何となく田舎暮らしをしたいと行ったが、実はコミュニティをもう一度作り直さなければいけないと分かり一生懸命活動した。但馬はまだ役割分担が形成されているが、10 年後になって高齢化が進んできたら、地域を維持することが難しくなってくる。
- ・ 丹波の場合は待望していたと思う。地元の人とは言えないが、他からきた人はよそ者だから言わしておけと受け入れてくれたことがある。それで同じような年代の人が、あの人がやるのであればということについていって、結構活発にやっている。
- ・ 大屋も地域ごとに違うと言ったが、一方で大屋には大屋の雰囲気がある。それが町村合併すると崩壊するところがある。崩壊してしまうといけないので潰れる手前ぐらいが、地域元気づくり協会の出番かもしれない。
- ・ 合併するとかかなり広がる。そうすると一つの行政体としてというよりは集落連合体のようになり、それがはっきりするからそれでも構わないと思う。但し、数十戸という単位で少なすぎる。そういうところのベースがもう少し実力を持ってやるようにならなければいけない。
- ・ 今、篠山市が検証されている。中心部はそれなりにサービスを受けているが、周辺部では今までは火事になってすぐ前に消防署があって消してくれたが、篠山の真ん中から消防が来るから完全に焼け落ちて人まで死んだということがある。そういうことが無いようにしなければいけないが、まんべんなくというのは無理だろう。
- ・ ジェンダーの問題から話が発展しているが、来週の WS は民家再生の担い手で、これは住まいづくりと同じで、結局住みつけするような場合の民家再生は、やはりかなり女性が推進力になっていることははっきりしている。
- ・ 田舎住まいの情報サービスが、小森先生が出してくれた話以外に、地域コミュニティがどうなのかというのはすごく大事。それをどの程度情報提供できるのか。
- ・ 変には書かれないので無理だろう。そういう情報は表に出なくてもちゃんとしていると、行くとほっとするとか、大屋町でもそうだと思う。そういう評価にしかならないと思う。
- ・ ディテールは必要ないが、日々の暮らしのスケッチがあるといい。
- ・ 最近は NPO の活動とか、趣味のサークルとか、お母さんたちが集まった人形劇とか音楽会とか、そういうのが今までは勝手にやっていたけど、今は結構情報発信して皆行くようになってきたから、そういう格好で出てくると思う。
- ・ 行きやすい町と比較的入りやすい町、それはある。それをもう少し分かりやすく推薦できればいい。
- ・ 都会から来る人は I ターン J ターン U ターンもあるけれど、受け入れる町間組織というのがどこも確立されていない。最初は頑張ってお世話しようかと思うが、その内疲れてしまい部署が変わると続かない。
- ・ 世話している人の部署が変わると続かないから、やはり民間組織でうまく考えて世話すればもっと広がると思う。大屋町はたまたま上山さんのように長く住んでいる人がいるから、逆にそういう人が外に発信してくれる。金谷さんの息子さんが発信してくれているし、そうするとまた人が集まってくる。その時に、受け皿の誰かがいないと駄目だということ。
- ・ 私の周りでは外から帰ってきた人というのはなかなか無い。地元に残った人間は、大学を出て公務員で田舎に帰ってきたという感じで、その人たちは役場に入っても別に何がしたいというわけでない。町にパワーになる人というのは、ある程度、やはり 40 ぐらいになって帰って来た方は割にパワーを持っていて、議員になって活動するとかいうことはあるが、なかなかパワーを持った人にぶつかる確立というのは低い。神戸のような都市部であれば、何かの会に出れば気の合う人を見つけて、ある程度の組織ができてしまうが、この辺であれば何回か会に出ても会う確率がなかなか無い。但馬は非常に広範囲なところで、いざ気の合う人ができて活動しようにも時間がかかりすぎて集まらない。

- ・ 定年退職で帰って来た方がいる。したいことを一杯抱えて帰ってきたが、それを2年間で大体やってしまった。後は何をしようかと思っても、老人会には入れてもらえないし、要するに体をもてあましている方がいます。集落の中にも定年退職しても、どの会にも属せない人が何人かいる。
- ・ 田んぼや山仕事ができるのであれば、そういうこともいいだろうが、何となく帰って来たという方だとそういうことを一から始めるのは大変だと思う。産業が無いのはかなりきつい。先ほど奥さんがという話があったが、共稼ぎできるかという、その辺が難しい。だから収入も激減する。
- ・ Iターンで根をあげて出て行く方は、やはり仕事が一番重い。次に人間関係。ほとんどの人が、40前後の人が共稼ぎ、共働きをしている。都会では、主人がサラリーマンで奥さんがパートをしていて、いきなり田舎へ来たたとんにこの社会に入っていく。近所も全部初めてで、働きに行ったところも全く新しいコミュニティで、両方とも逃げ場が無い。それで潰れる人が多い。
- ・ まちづくり人フォーラムを過去2回やってきて分かってきたことは、Uターンで頑張ろうとしているけれども一歩前に出られない人、それと外に全然出ていないが地元で何かをしなければいけないと思うが、それを受け入れてくれる環境が無い人がいる。これをどのように受け皿をつくって吸収するかで新しいエネルギーが出てくると思う。こんなに立派な人がいるのだということがある。
- ・ 2年ほど前にこの村に住んでいた若い世代がいたが、やはり働き場所がなくて豊岡の方まで通っていて、とうとう都会へ帰って行った家族がある。それも空き家になっている。やはり農業で食えるという体制が無いと難しい。
- ・ 住みつくという田舎暮らしの話がメインになっているが、果たしてヨーロッパとか東京で地方へ人口が拡散している中身が、本当に地域に住み着いてしまうような住み方がメインなのか、それともリゾート的なリタイヤして戻る人がメインなのか、その辺はどうなのか。
- ・ 昔から農業をやりたいと言って田舎へ帰る人はかなりいる。日本は農地法の規制が大変厳しく、農業をやりたいと田舎へ帰ることは事実上不可能。規制緩和でかなり変わるとは思うが、何と云っても田舎は農業だから、農家を出て行くことは自由だが、農業にエントリーすることが大変難しいということが海外諸国と比べて大きな違いの一つ。二つ目は、日本の場合は公共投資という名の元で、田舎へ外のお金が継続的に流れて、これが田舎の経済を支えてきた。それを配分する機構として地方のいろいろな仕組みができたが、そのシステムが急速に崩壊してきている。まだまだ深刻になって田舎の雇用問題はもっと顕在化するのではないかと思うが、これはかなり異常な状態で、この先を考えていく上では大事なことだと思う。最後に、はっきり言えば教育問題で、たとえば尼崎の人口がどんどん減って戻さなければいけないと言っているが、実際にどうかは別として表に出ないのは基本的には親が尼崎の学校はという思いがある。先ほど話があったが、特に田舎の学校は今の都会の人から見たら4キロも5キロも歩くと信じていた。先ほど仕事の話があったが、たとえば高齢者向けのいろいろなサービスの提供を田舎でやろうと思っても、それ自体の仕組みが固まっていて新たにそういう分野に参入しようとしても非常に抵抗が大きいという話も聞いた。逆に三木の緑が丘のヒアリングでは、お年よりを但馬や丹波の特養に預けるという話を聞いた。フロリダあるいはイギリスでも南海岸というのは一番高齢化率が高いのだが、これはキャラバンなどを含めて高齢者が南の太陽の多いところを求めて移動するのが非常に大きなウエイトを占めている。日本ではそういう流れはあまり無いと思うが、これから先は高齢者がどこで過ごすのかというのが大問題になってくる。実は私も田舎暮らしを実践しなくては行けないということで、いろいろ相談したり各地を見て回ったりしているのだが、いくつも問題がある。まず地方の自治体がつくっている宅地は値段も高い上にひな壇で、わざわざ田舎へ行くのにひな壇へ入るつもりは無いことが一つ。もう一つは、ひのき、杉の林のあるところはアレルギーで駄目だということと大体8割から9割が落ちる。三つ目に、売ってくれということ見つからない。空地は山のようにあるが、なかなか手に入らない。田舎暮らしがこんなに難しいということは知らなかった。特に我々ぐらいの世代になると、いつまでも車に乗れるわけではないので、代替的な交通機関があるところということになるとごく限られてくる。これでは田舎暮らしを皆さんに勧めようと思っても難しいが、高齢者の田舎暮らしをある程度成功させないと次に続かないので、夢を捨てずにあちこち探していく。
- ・ 淡路島に高齢者のサービスで話があるようだが。
- ・ 五色町が非常に健康に力を入れているので、随分移住者がある。
- ・ 先ほどの映像は車から見ると確かにそうだが、住んでいる方から見るとどうなのか。

- ・ こちらに来た方は石垣が続く田を見てきれいだと言うが、住んでいると気がつかなかった。

テーマ2：プラットフォームの役割

- ・ 地元出身者が定年で帰って来て2年ですることが無くなってしまったという話があったが、これは人的な資源だと思う。こういう人的な資源が地元にあるならば、仕組みをつくれれば担ってもらえるのではないか。
- ・ 空き家をしっかりしたところが管理して、1週間単位で来てもらうことが継続できたら、その中から永住したいという人が出てくるのではないかと思う。
- ・ 体験居住ができる場所を提供してもらえないかと相談している。当然それを管理する人も必要だが、京都ですでに体験居住をやっているNPOがある。できれば改修の費用とかは相談して、管理費はある程度ペイできる形で体験居住の場をつくる試みをやってみる価値はある。
- ・ 先ほど言われた「ほんまもの」という言葉が非常に重要で、ほんまもの暮らしや食べ物、生き方を気づかしてくれるシステムとしての体験居住が必要。もう少し長い期間の居住という意味では、借りたり買ったりして住もうという時に、どうサポートしてくれるのか。仕事のことは大変難しい問題だが、サポートの問題も重要なことだと思う。
- ・ 自力建設をやりたがる学生や社会人を組織化して地元を持って行き、空き家改修でもいいし、自分たちの基地づくりでもいいし、そういうのを定着させていけないか。そういう人たちが来たがるためにはどうすればいいかは、ほんまもんを集める。そのサポートをプラットフォームでやれる仕組みができないだろうか。
- ・ たとえば出石の芝居小屋は今どうなっているのか。
- ・ 土地公社が購入して公有化されている。ただし活用については金が無い。地元の人が掃除して整備してやるという動きが出てきつつある。
- ・ 東京の向島に空き家の長屋がある。その長屋へ仕事の無い建築関係の若者たちが住み込んで自分たちで中をデザインしている。家を自分たちで好きなようにしなさいという形になれば、若者が住み着いてやってしまう。向島よりここの方が暮らしやすいと思う。
- ・ 居住ということは、生活イコール仕事だから、その問題が利用者の側にイメージとしてちゃんとできていないと失敗する。そのマッチングシステムをつくってあげないといけない。利用者に対して、こんな生活で、こんな仕事だということを情報発信しながら、思い違いもかなりあると思うので、その辺を修正していく作業が必要になる。今日の話で失敗例をあまり聞けなかったが、失敗例を調査して充分聞くことによって、逆にこういう案内をしていけばということが分かってくるのではないか。
- ・ 空き家が相当数あるのに出ないことが非常に気になっている。地域内での情報はすぐ出てくるが、それは限られた人間関係の中での情報で、それはやはり信用できるからということ。機関として信用できるというのはどういうシステムなのかがよく見えない。行政が入ることが一助になるのかどうか。私であれば空いた家を貸すかということ、どんな使われ方をするのが分からないから多分貸さないだろう。その問題を解決しない限り、空き家は絶対出てこないだろう。
- ・ 敷金などの制度がはっきりしているから大都市の場合は動いている。もう一つは企業が借り上げて社員に貸すという形で担保している例もある。だから行政が入れば安心だというのは必ずしもそうではない。公開性、透明性、そして反則した者には必ずペナルティが科せられるという条件があればいいと思う。そういう成功例を次年度は探す必要がある。
- ・ 地主に家主がいない空き家は、空いていてもその人は地域がどうなるうとも何の関係も無いと思っている。極論だが、10年間空き家のままなら地域がもらうとかしなければどうしようもない。
- ・ 大屋町の中にセカンドハウス村というのが。そこは土地がタダで建物だけ自分で建てて、済んだら土地を返すという仕組みで、そこに住み込んでいる人もいる。そういうふうに別に、都会の人が来てもいい場所をつくり開放するというのも考えられる。空き家は所有権があるから難しい。
- ・ 今の日本の制度の中でできるかどうかは別にして、農協が事業の一つとしてやることは考えられる。基本的には農民の味方で、地域の事情を良く知っていて、問題が合った時にちゃんとカバーしてくれる組織。公共団体はやはり無理だと思う。
- ・ 賃貸よりは売り買いの方が話としては進めやすい。しかし大屋町内に不動産屋が無い。そういうシステムが必要になる。

- ・ 古民家なり景観なり残すべき資源があれば、単に売り買いの財だけではなしに、そういうこと協力してくれる買い手でないと意味が無い。売買だけでは全部壊して別荘を建てて、本当にそれでいいのかという問題が出てくる。
- ・ 少子高齢化の問題と、人口の流出の問題と、空き家を有効活用したいというのが、この地域のニーズになっていないから動かない。
- ・ 現実的にはそうでもない。都市部に出て行き帰って来る予定の無い方がたくさんいる。都市部に住んでいるが、家があるために田舎との付き合いを義務的にしている。物件として転売すれば付き合いも切れてと思っている人がいる。
- ・ 世代が変わらないとだめだという考え方をするならば、人々が出て行ったのは 1960 年代で、そろそろ世代が替わる頃。世代替わりしての処分の問題としては、そろそろ売買のチャンスではないか。
- ・ 田舎へ住みたい人のプラットフォームをつくれればどうか。需要をまず捉えて、これだけの待ち人がいるということで情報発信して、それに応える人が応募してくるような仕組みが必要ではないか。
- ・ 但馬へ行きたい人、淡路へ行きたい人のバンクをつくるには、まずこういうおもしろいことがあるとの実例を見つけて借り手のニーズを整理する必要がある。
- ・ 丹波は民間でかなり積極的にやっている。福知山線の電化複線化は大きい。柏原までで、山南町ぐらいから先はがたっと減るが。
- ・ 生野の一番奥に黒川といういいところがあるが、体験学習に近いようなことを年に 1 回やっている。そういう体験学習のような機会を地域の人がやろうという話を支援していく。来てほしくないというところでやるのはしんどい。来てほしいところに助けに行きますというバンクはどうか。体験学習や体験宿泊をやりませんかというのを公募する。
- ・ 都市部のまちづくり協議会と、町や村をつなぐことも考えられる。サマーフェスタで田舎の野菜を売るとすごく人気がある。大屋なら大屋の有機野菜と定点を決めて、フェスタで売る代わりに別の時にこちらへ来てどこかへ宿泊して交流するとかが続いていけば、大屋が特別な場所になる。
- ・ 情報発信をどういう形でやるか。メルマガということを県に出しているが、情報量、写真などを載せようとすればやはりホームページだろう。
- ・ 子どものことで言うと、田舎と行き来する場合、こちらの学校の単位が向こうで認められるとかいう教育の仕組みづくりがあればいい。総合学習でいろいろな体験や交流をして、子どもから親にそういうつながりが出てくるので、積極的に学校単位で交流して行き来できれば、田舎の良さも都会の良さも分かる。お互いが認め合うようなことを教育の段階からしていく必要があると思う。
- ・ 田舎暮らしの元気印の女性から話を聞くと、フランス料理の店も少し行けばあるし、映画を見るなら神戸まで車で行くと 2 時間半で行けると言う。田舎にしながら都会的な楽しさも味わえるし、田舎の素晴らしさも享受できるということを、もう少し PR することが必要。
- ・ コレクティブハウスやグループハウスを考えた時に、そういうグループならある程度信頼性があるって、年がたってからもお互いに助け合って住むという形がアピールできる。集まって住むという仕組みもあっていいのではないかと思う。
- ・ 田舎暮らしを希望している人が、どんな田舎暮らしを希望しているのかを的確につかむ必要がある。田舎暮らしでこういうことをやりたいのだということがあれば、もう少しアプローチもできる。
- ・ 今日のお二人の話がビデオか何かで用意するとかして、来たらこういう格好ですよというのを見せながら希望者登録をしてもらうような役割をプラットフォームで担う。
- ・ 田舎へ住みたい人のリストができれば、その人たちで次年度にフォーラムをしよう。
- ・ 丹波の今田町に芸術家集団があり、封建的な陶器の町に刺激を与えて、地場産業とタイアップして新たな動きを起こそうとしている。これは仕事づくりのヒントになる。
- ・ 岡山県は田舎暮らしを HP からたどれるようになっている。兵庫県はどういう形になるか分からないが、いろいろな形での情報が提供できるような仕組みをつくらなければならない。最初から完璧なものをつくるのは無理だが、いろいろなライフスタイル、最近ではスローライフと一言で言われるが、そういう変化に対応したデータを提供できる仕組みをつくるのが大事だと思う。

「兵庫まちづくりプラットフォーム」設立準備会

〒651-0076 神戸市中央区吾妻通4丁目1番6号

神戸市生涯学習支援センター北棟3階

特定非営利活動法人神戸まちづくり研究所内

TEL : 078-230-8511 FAX : 078-230-8512

E-mail = LET07723@nifty.ne.jp

Homepage = <http://www.netkobe.gr.jp/machiken/>

本冊子の一部または全部を無断で複写、転載することを禁じます。